

14	岡崎	矢作西小学校	ヤスモト シンゴ
			氏名 康本 慎吾
分科会番号	11a	分科会名	保健体育（体育）

研究題目

見方・考え方を働かせ、協働的に課題を解決していく中で、よりよい動きを追究する児童の育成
— 6年 ボール運動「ラインミニバス」の実践を通して —

研究要項

1 主題設定の理由

昨年度行ったボール運動（ゴール型）「サッカー」では、生き生きとドリブルやシュートをして得点に積極的に関わる児童がいる一方で、コート隅で立ちつくし、動き方が分からず試合に参加しきれない児童の姿も見られた。振り返りでは、「何をしたらいいか分からず動けなかった」「ボールに一度も触れなかった」といった記述があり、多くの児童が、ゴール型のボール運動特有の空間の使い方や相手との駆け引きを伴う動きを十分に学ぶことができなかったと考える。本学級の児童は、課題に対して仲間と相談しながら取り組む姿が多く見られる一方、ボール運動のゲームになると自分のことで精いっぱいになり、仲間との位置関係やボールの動きに応じて動きを変えることが難しい児童もいる。そこで、体育の見方・考え方を働かせながら、仲間と協働的に課題を解決する中で、相手や状況を捉えた動きを追究してほしいと考えた。

本実践では、ボール運動（ゴール型）「ラインミニバス」を行う。本教材は、ミニバスケットボールを基にしたオリジナル教材であり、コートを分けたり、ボール操作をシンプルに整理したりすることで、ボールを持たない動きが価値を発揮しやすい教材構造となっている。また、軽くて柔らかいボールを用いることで、だれもが安心して運動に取り組むことができる。本単元では、導入場面でICT機器を活用して自分の動きを客観的に捉え、課題を見出すことで、児童にとって切実感のある課題設定につなげる。また、ドリルゲームやタスクゲームによって、ゴール型に必要な知識・技能を段階的に身に付けられるようにする。さらに、教師が空間の使い方や仲間との関わりに目が向くような視点を示すことで、児童が協力して課題を解決し、空間を生かした有効なプレーを追究する姿が多く見られると考える。そこで、研究主題を「見方・考え方を働かせ、協働的に課題を解決していく中で、よりよい動きを追究する児童の育成」と設定し、検証することにした。

2 目指す児童像

見方・考え方を働かせ、協働的に課題を解決していく中で、よりよい動きを追究する子

この目指す児童像を以下のように捉え、研究に取り組む。

見方・考え方を働かせるとは…本単元では、文部科学省（2017）が示す「体育の見方・考え方」に基づき、本教材「ラインミニバス」を、ボール運動（ゴール型）の特性に着目し、「する」「みる」「支える」「知る」といった多様な関わり方と関連付けながら、よりよい動きの追究に生かそうとすること。

協働的に課題を解決するとは…児童が自ら見出した課題や授業で提示された学習課題について、仲間と考えを共有し、対話や運動を通して試行・改善を重ねながら解決すること。

よりよい動きとは…攻撃ではゴールに迫るために、守備では相手の攻めを防ぐために、空間の使い方や仲間との関わり方、動きの選択を適切に組み立てるなど、相手や状況を的確に判断し、目的に合った有効なプレーのこと。

3 研究の仮説と手だて

【仮説】

児童の気付きと切実感を引き出し、運動の特性に即した技能習得を意図したゲームや課題解決の見通しとなる視点を設定すれば、児童は見方・考え方を働かせ、協働的に課題を解決していく中で、よりよい動きを追究できるだろう。

研究の仮説の妥当性を検証するために、以下の手だてを講じて、授業を実践していく。

【仮説に対する手だて】

手だて① **みる**

授業の導入場面において、前時の児童の動きが可視化されたヒートマップや、定点カメラの映像などの資料を提示することで、児童の気付きと切実感を引き出す。

※ヒートマップとは…児童がコート上のどの領域にどの程度滞在したかを色の濃淡によって示す可視化手法である。本研究では、愛知教育大学高嶋研究室より

り機材の提供を受け、児童一人につき一台の GPS 端末を携行させ、授業中の移動データを収集した（資料 1）。

手だて② **する** **知る**

児童の実態に応じて、ドリルゲームやタスクゲームを実施することで、児童がボール運動（ゴール型）の特性に着目し、特定の技能を習得できるようにする。

※ボール運動（ゴール型）の特性とは…攻撃と守備の空間的な駆け引きを基盤とし、仲間との連携や状況判断を通じて、ボール操作やボールを持たない動きによって、ゴールを奪い合う運動の性質のこと。

手だて③ **支える** **知る**

児童の動きや考えを見取ったうえで、課題解決の糸口となる視点「今日のキーワード」を設定することで、児童が見通しをもって協働的に課題を解決できるようにする。

以下、児童 A を抽出児童として、手だての有効性を検証していく。

【抽出児童 児童 A】

児童 A は、どの授業にも意欲的に取り組み、仲間と相談しながら課題に向かう姿が見られる児童である。しかし、6 月に行ったボール運動（ネット型）「キャッチバレーボール」では、自身の背の低さを意識するあまり終始同じ位置からトスを上げる役割に徹しており、相手や状況に応じて判断しながら動きを工夫することができなかった。単元末の振り返りでは、「トスを優しく上げることはできたけど、ブロックされてしまった。」「どうしたら私でも点が取れるか知りたかった。」と述べており、多様な関わり方から課題を見付けたり、解決したりすることが十分にできなかったことが伺える。そこで、本単元では、体育の見方・考え方を働かせて、仲間と協働的に課題を解決していく中で、よりよい動きを追究していく姿を期待し、抽出児童として設定した。

4 研究計画

学習課題（学習内容）	時間	手だて
ラインミニバスをやってみよう ・ラインミニバスのルール理解 ・簡単なボール操作	1	・パス&ターンゲームを実施【手だて②】 ・スクエアパスゲームを実施【手だて②】 ・ウォーキングゲームを実施【手だて②】
パスをつないでゴールにせまるには、何が大切なのだろう ・ボールをもらう動き	1	・前時の動画を提示【手だて①】 ・3対2パス回しゲームを実施【手だて②】 ・今日のキーワード「距離感」「動く」を設定【手だて③】
得点するためには、どう動けばよいのだろう ・ゴールに向かう動き ・空いた空間へ入る動き	1	・前時のヒートマップを提示【手だて①】 ・10秒ゲーム（2対2）を実施【手だて②】 ・今日のキーワード「ゴールへ」「相手のいない場所へ」を設定【手だて③】
攻撃での自分の役割を考えよう ・味方を生かす位置取り ・パスコースづくり	1	・前時の動画を提示【手だて①】 ・ハーフコートゲーム（3対2）を実施【手だて②】 ・今日のキーワード「サポート」「パス&ゴー」を設定【手だて③】
相手の攻撃を防ぐためには、どうすればよいか考えよう ・マーク・コースを切る動き	1	・前時の動画を提示【手だて①】 ・今日のキーワード「マーク」「背中にゴール」を設定【手だて③】
ボールを持たない人の位置について考えよう ・空間を広げる・仲間を助ける動き	1	・前時のヒートマップを提示【手だて①】 ・1/3コートゲーム（4対3）の実施【手だて②】 ・今日のキーワード「広がる」を設定【手だて③】
チームの課題を見付け、解決方法を考えよう ・協働的に課題を解決する	1	・前時の動画を提示【手だて①】 ・実態に応じた今日のキーワードを設定【手だて③】
今までの学びを生かしてリーグ戦をしよう	1	・前時の動画やヒートマップを提示【手だて①】 ・前時までの今日のキーワードを精選し、設定【手だて③】



GPS 端末を持って移動した軌跡が可視化される。軌跡が重なるほど、緑、黄、赤色の順に色が濃く表される。

資料 1 ヒートマップについて

5 実践と考察

以下に手だての有効性について検証しながら実践と考察を述べていく。
また、児童 A の着用しているビブスは水色の 9 番である。

(1) 動きを視覚的に捉え、運動の特性に着目しながら、仲間と協働的に課題を解決する中で、得点につながる動きを追究していく児童 A (第 1～3 時)

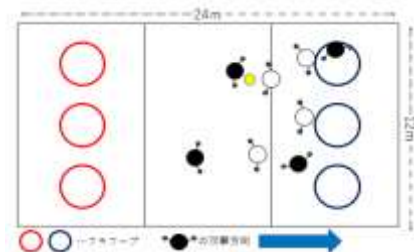
本単元の授業が始まる前に、ルールを確立するためのテストプレイやコート作りを本学級の児童と行った。期待を高めながら活動する児童の中に児童 A の姿が見られた。

第 1 時では、学習課題「ラインミニバスをやってみよう」を設定し、ルール理解 (資料 2) や基本的な技能習得をねらいとして授業を行った。まず、パス&ターンゲームやスクエアパスを実施した【手だて②】。児童 A は当初、落球が見られたが、仲間から助言を受けながら (資料 3) 繰り返し活動することで改善していった。また、ワークシートには「手をほしい位置に構えることが大切」と記述しており、実際に合図となる手の構えを意識してボールを受ける姿が見られた (資料 4)。さらに、ウォーキングゲーム

を行ったところ【手だて②】、第 1 時の振り返りでは、相手や仲間の位置を見ながら動きたいという記述が見られた (資料 5)。これらのことから、児童 A はボール運動 (ゴール型) の特性に着目しながら、基本的な技能や状況判断の視点を身に付け始めたと考える。

第 2 時では、学習課題「パスをつないでゴールにせまるには、何が大切なのだろう」を設定した。導入では、前時の動画を提示した【手だて①】。児童 A は、動画を見ながら自分たちの動きが密集していることや、パスがつかない原因について気付く様子を見せた (資料 6)。その後、「3 対 2 パス回しゲーム」を実施した【手だて②】。児童 A は、相手のいない場所へ動いてパスを受けたり、味方との距離を調整したりする姿を見せた (資料 7)。そこで、児童 A の実態を見取り、今日のキーワード「動く」「距離感」を設定した【手だて③】。ゲームでは、仲間に「もっと離れて」などと声を掛けながら、相手や仲間との位置関係を意識して動く姿が見られた (資料 8)。振り返り

でも、動くことや距離感の大切さについて記述していた。これらのことから、児童 A は可視化資料から課題を見出し、タスクゲームでの成功体験や仲間との関わりを通して、ボールを持たない動きの重要性を理解し、よりよい動きを追究していったと考える。第 3 時では、前時のヒートマップを提示した【手だて①】。児童 A は自分の



- ・ 4 人対 4 人 ・ クォーター制 (3 分× 4)
- ・ 身体接触は禁止。
- ・ コートを 3 つのエリアに区切り、1 チーム 3 人までしか入れない。
- ・ 中央のエリアを飛ばしたパスや、ゴールのフラフープがあるエリア以外からのゴールは禁止。
- ・ 守備者の頭を越えるようなパスでの得点はできない。
- ・ ボール保持者は動けない。(2 歩程度は許容される。ピボットターンで体の向きを変えるのはよい。)
- ・ ボール保持者からボールを奪うことはできない。パスカットやルーズボールを拾うことはできる。
- ・ フラフープの中で味方からパスをもらったら得点。
- ・ フラフープの中に 3 秒以上いてはいけない。
- ・ 以上のルールを踏まえ、ゲームは児童のセルフジャッジで進める。

資料 2 ラインミニバスの基本ルール

A : 児童 A (以下資料では A)
T : 教師 (以下資料では T)
C : 児童 A 以外の児童 (以下資料では C)

A : 先生、キャッチのコツありますか。
T : (児童 C) はどうやってキャッチしてるの。
C : 初めから胸の前で両手を出すと落としにくいよ。
A : 分かった。ありがとう。

資料 3 第 1 時授業記録



資料 4 基本的な技能を習得していく児童 A (赤枠)

学びの振り返り

チームワークが大切だと思ったので、自分の今いる位置や相手や仲間の位置を見てボールどうやってとって自分はどうに動けばいいかを考えて行動することができるようになりたい、仲間ともっと話合って作戦をしたいです。

資料 5 児童 A の第 1 時の振り返り

T : 動画を見てみて、自分の動きはどう？
A : 意外と動いていない。
T : 自分では気付かなかったところとかある？
A : ボールに近すぎるからパスがつかないかもしれない。
T : いろんな気付きがあったね。

資料 6 第 2 時授業記録



資料 7 技能を高める児童 A (赤枠)

授業メモ
上 相手のいない場所 (青枠) に動く児童 A
下 ボール保持者と距離 (青矢印) とる児童 A



授業メモ
上 相手の位置を確かめて空間 (青枠) 動く児童 A
下 味方から距離 (青矢印) をとってパスを受ける児童 A
・ 「もっと離れて」「動いてもらって」と仲間に声を掛けていた

資料 8 「動く」「距離感」を意識してゴールにせまる児童 A (赤枠)

動きを確認し、ゴールに向かう動きが少ないことに気付いた(資料9)。そこで、学習課題「得点するた

児童Aのヒートマップ(第2時)



資料9 第3時授業記録

T: どう?
A: 真ん中あたりが赤くなっていて、ゴールにあまり向かえていない。
T: なるほど。どうしたらいいかな。
A: もっとゴールに行った方がいいと思う。
T: それが今回の課題だね。



資料10 「10秒ゲーム」での児童A(赤枠)

めには、どう動けばよいのだろう」を設定し、「10秒ゲーム」を実施した【手だて②】。児童Aは、制限時間内に得点しようとゴールへ積極的に走り込む姿を見せた(資料10)。また、振り返りでは、ゴール付近でパスを受けることや、ゴールに近い場所へパスを出すことの有効性について記述していた。その後、「ゴールへ」「相手のいない場所へ」というキーワードを設定した【手だて③】。ゲームの中では、仲間と声を掛け合いながら動きを改善し、相手のいない場所へ走り込み、得点につながるプレーが見られた(資料11)。これらのことから、児童Aは可視化資料から課題を捉え、仲間と協働的に課題を解決しながら、得点につながる動きを追究していったと考える。



資料11 得点につながる動きを追究する児童A(赤枠)

授業メモ
上 ゴールへ走りこむ仲間に合わせたパスを出す児童A
下 相手のいない場所へ走りパスを受ける児童A

資料の動画を見て、青チームはなぜ得点できたのか考えてみよう
オフザボールの子がボールを取りやすい位置に動いているから。前だけではなくていったん戻しているから。

資料12 第4時ワークシートの児童Aの記述



授業メモ
・味方の後ろでパスを引き取り、すぐさま前方にパスを出し、ゴールへ走りこむ児童A
・「パスをしたらすぐ動いて」「私がサポートするから後ろも使っていよ」と発言

資料13 第4時ゲームでの児童A(赤枠)

(2) 相手や状況に応じた自分の役割を捉え、空間の使い方や仲間との連携を深めながら、最適な動きを選択していく児童A(第4～6時)

第4時では、前時に撮影した得点場面の動画を提示した【手だて①】。児童Aは、ワークシートに「オフザボールの子が取りやすい位置に動いている」と記述し(資料12)、得点につながった要因を仲間同士の位置取りや連携から捉えていた。そこで、学習課題を「攻撃での自分の役割を考えよう」と設定し、「ハーフコートゲーム」を実施した【手だて②】。活動中、児童Aは「前が難しかったら後ろに下げよう」などと発言し、攻撃を継続するための動きを考えていた。その後のゲームでは、仲間と声を掛けながらプレーし、味方を支える位置へ動き直しながら攻撃に関わる姿が見られた(資料13)。そこで、「サポート」「出したら動く」を今日のキーワードとして設定した【手だて③】。児童Aは仲間と声を掛け合いながらプレーし、振り返りでもサポート役の重要性について記述していた(資料14)。これらのことから、児童Aは空間の使い方や仲間との関わりを踏まえて自分の役割を考え、よりよい動きを追究していったと考える。

学びの振り返り

同じとこにいれるのは3人までだから1人になったと役割をすれかわるかわらなくて、たっているだけだったけどそこにも役割があることを知ることができた。
ゲームのなかでは「オフザボール」や「オンザボール」や「サポート」などの役割があって、1人のときはサポートの役割ができるとわかったから、実際にやってみようと思った。
ボールをもち回してパスをしたらオフザボールになるからすぐに動いて、はうが空をとれるようになることもわかったから、次回挑戦したい。

資料14 児童Aの第4時の振り返り



資料15 パスカットする児童A(赤枠)

第5時では、学習課題「相手の攻撃を防ぐためには、どうすればよいか考えよう」を設定した。導入では、失点場面の動画を提示した【手だて①】。児童Aは、「マークをしているつもりでも外されてしまう」と記述しており、守備の課題を自覚していた。そこで、今日のキーワードを「マーク」と設定した【手だて③】。ゲームでは、仲間と声を掛け合いながら守備に取り組む姿が見られたが、相手を見失う場面も見られた。そこで、「ゴールは背中」という視点を追加した【手だて③】。その後、児童Aは体の向きを調整しながら守備を行い、パスカットにつながる場面が見られた(資料15)。振り返りでも、守備の体の向きやパスコースを意識したことについて記述していた(資料16)。これらのことから、児童Aは相手や状況に応じて守備を改善し、よりよい動きを追究していったと考える。

学びの振り返り

最初は相手にボールを取られてしまったら相手にボールを取られてしまいましたが、途中で相手のゴールに向けて守備をすることで少しはパスカットをすることができました。相手が回っていたので動きを自由にすることができなくなりました。相手のチームは、相手のチームは一人一人にマークをつけていたので相手はパスが通りにくくなってしまっていたのでそこが相手のチームのいい所だと思いました。パスカットをするためにパスコースに入ることでゴールへ通ることはできなくなりました。そのゴールを相手に奪取されてしまっているボールを取られてしまったので、次は、ボールの奪取位置を考えたいです。

資料16 児童Aの第5時の振り返り

ーム全体の動きが中央付近に偏っていることに気付いた（資料 17）。そこで、学習課題を「ボールを持たない人の位置について考えよう」と設定し、「1/3 コートゲーム」を実施した【手だて②】。活動の中で、児童 A は仲間に「広がってもらおう」と声を掛けながらプレーし、外側の空間を活用して攻撃する姿が見られた。そこで、今日のキーワードを「広がる」と設定した【手だて③】。ゲームでは、ボールの反対側へ移動して空間を広く使い、得点につながる動きが見られた。振り返りでは、「広がってパスをもらうことで守備も広がるので人と人の間に隙間ができ、そこにパスをすれば上手くパスが通りました。」と記述していた（資料 18）。これらのことから、児童 A は空間の広がりや仲間との関わりを関連付けて捉えながら、よりよい動きを追究していったといえる。

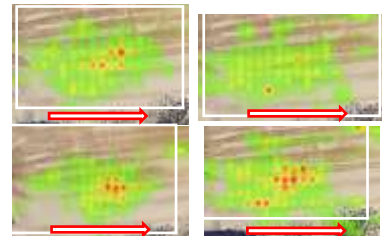
（3）見方・考え方を働かせ、協働的に課題を解決していく中で、よりよい動きを追究していく児童 A（第 7・8 時）

第 7 時では、学習課題「チームの課題を見つけ、解決方法を考えよう」を設定した。導入では、前時のゲーム動画を各チームに提示した【手だて①】。児童 A は動画を見ながら仲間と相談し、「固まっていると思ったからもうすこし広がるようにする」「すばやくパスを回した方がよさそう」と課題を見出していた（資料 19）。チームごとの実態に応じてキーワードを設定し、児童 A のチームは「ボールを動かす」とした【手だて③】。ゲームでは素早くパスを回しながら攻撃する姿が見られた。その後、仲間との話し合いから「切り替え」という視点も共有され（資料 20）、攻守の切り替えを意識したプレーへとつながった（資料 21）。これらのことから、児童 A は可視化資料を基に課題を見出し、仲間と協働して解決方法を考えながら、よりよい動きを追究していったと考える。

第 8 時では、学習課題「今までの学びを生かしてリーグ戦をしよう」を設定した。導入では、前時のヒートマップを提示した【手だて①】。児童 A は仲間と相談しながら動き方を確認し、課題を共有する姿を見せた（資料 22）。そこで、「ゴールや相手のいない場所へ」「ボールを動かす」「広がる」

「マーク」「ゴールは背中」といったこれまでのキーワードを精選して設定した【手だて③】。ゲームでは、仲間に声を掛けながら空いた空間へ走り込み動き（資料 23）や、適切なサポートによるパス回し、マークや体の向きを意識した守備が見られた（資料 24）。振り返りでは、「キーワードをみんな意識して、迷わずに判断でき、パスを回すスピードが速くて守備が追いつけないようにすることができて沢山点を取ることができました」「ずっとマークを

児童 A のチームの第 5 時ヒートマップ



自分や相手のヒートマップ。データを覚えて、気付いたことは何だろう

チームの全員と色や形が結構似ている。自分のは赤が少なめ。

資料 17 ヒートマップを見ながら会話する様子と第 6 時ワークシートの児童 A の記述

前までは、オンザボールの子に近づいてパスをもらっていたけれどそうすると、ずっと止まっていた守備の子達が近づいてきてしまっていました。でも、広がってパスをもらうことで守備も広がるので人と人の間に隙間ができ、そこにパスをすれば上手くパスが通りました。前に広がることでゴールに行くことができけれど、それでも止まってしまうことはあるので横に広がることも大切だと思っています。でも守備が大きくなってしまいうつとしっかり守備ができるようになります。また、今までの守備の仕方は、守備したい人の前についていたのですがその子の動きがわからなかったです。だから、次は後ろについて守備をして動きを絡めてその子にパスが来たら前に手を伸ばしてパスカットをしたいです。

資料 18 児童 A の第 6 時の振り返り

動画をみるとゴールのところにいいるときは固まっていると思ったからもうすこし広がるようにする。すばやくパスを回した方がよさそう。

資料 19 第 7 時ワークシートの児童 A の記述

A：だんだん点が取れなくなってきたね。
C：もっとさ、ボールが出た後とか、ボールを取った後にもっと早く攻めたい。
A：相手油断してるもんね。
C：切り替えを早くしよう。

資料 20 第 7 時授業記録

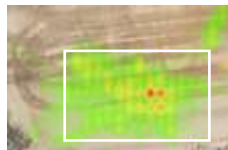


授業メモ

- ・ボールを相手から奪ったあと、素早く攻撃に移行し、得点につなげる児童 A のチーム
- ・児童 A は「切り替えて」と仲間に声を掛け、パスを出し、相手のいないゴールへ走りこんだ

資料 21 第 7 時ゲーム後半での児童 A（赤枠）

児童 A のヒートマップ（第 7 時）



資料 22 第 8 時授業記録

A：やっぱりもっと広がって攻めた方がいいね。
C：早く攻めたいから無理に広がらなくていいんじゃない。
A：早く攻めるときは気にしないでいいけど、時間をかけるときは広く攻めていこう。



授業メモ

児童 A は、「広がり」「前に出よう」と仲間に声を掛けて、相手のいない空間へ走りこみ、得点につなげた

資料 23 相手のいない空間へ走りこみ、得点につなげる児童 A（赤枠）

学びの振り返り

私たちのチームは、今までボール争奪のために止まってしまう守備が固まってしまうことが多かったけれど、今日は、キーワードをみんな意識して、迷わずに判断することができ、パスを回すスピードが速くて守備が追いつけないようにすることができて山山点を取ることができました。また、チームの課題だった相手点を取る時に一人ひとりにマークをすることは、ずっとマークを付けていることができたのであまり点を奪われないことができました。周りを見て相手のチームの動きを見てみると、点を取るための動き方や守備からよけてパスをもらうなどという動きが山山あったのでいいなと思いました。次の授業では、他のスポーツでも生かしていきたいです。

資料 25 児童 A の第 8 時の振り返り



授業メモ

- 上児童 A は、すぐにサポートに入り、攻撃を継続させた
- 下児童 A は相手との位置関係を意識しながら体の向きを調整し、パスコースに入って粘り強く相手（青枠）をマークした

資料 24 攻守双方の場面で技能を発揮する児童 A（赤枠）

ついていられることができたのであまり点を取らせないことができました」と記述していた（資料 25）。これらのことから、児童 A は見方・考え方を働かせながら相手や状況を判断し、仲間と協働して課題を解決する中で、空間の使い方や動きの選択を工夫し、よりよい動きを追究することができたといえる。

6 成果と課題

【仮説に対する手だての成果】

【手だて①】児童の動きが可視化された資料の提示について

授業の導入場面において、前時の動画やヒートマップを提示したことで、児童 A は自分やチームの動きを客観的に捉え、課題を見出す姿が継続して見られた。第 2 時では、動画を通して動きの密集やパスがつかない要因に気付くことができた（資料 6）。第 3 時では、ヒートマップからゴールへ向かう動きの少なさを自覚し（資料 9）、得点につながる動きを考えるきっかけとなった。また、第 6 時には、ヒートマップを比較する中でチーム全体の動きの偏りを捉え（資料 17）、空間の使い方について仲間と考える姿が見られた。さらに、第 7 時では動画から攻撃の停滞という課題を見出し（資料 19）、改善方法について協働的に考えていた。これらのことから、可視化資料は、児童の気付きと切実感を引き出し、運動の特性に着目して課題を捉えることを促すうえで有効であった。また、仲間との話し合いの根拠として機能することで、協働的な課題解決を支える手だてとなった。

【手だて②】ドリルゲームやタスクゲームの実施について

児童の実態に応じて条件を工夫したドリルゲームやタスクゲームは、児童 A がボール運動（ゴール型）の特性に即した知識や技能を段階的に身に付けるうえで有効であった。第 1 時では、ドリルゲームを通して、パスを受ける際の手の構えの重要性に気付き、基本的な技能を高めることができた（資料 4）。第 2 時の「3 対 2 パス回しゲーム」では、相手のいない場所へ動くよさを実感し（資料 7）、ゲームにおいても位置取りを工夫する姿が見られた。第 3 時の「10 秒ゲーム」では、ゴールへ走り込む動きやゴール付近でプレーする意識が高まった（資料 10）。また、第 4 時の「ハーフコートゲーム」では、味方を支える位置へ動くなど、自分の役割に応じた動きを試行する姿が見られた（資料 13）。第 6 時の「1/3 コートゲーム」では、外側の空間を活用した位置取りの有効性を理解し、攻撃の幅を広げることができた。これらのことから、ドリルゲームやタスクゲームは、児童が運動の特性に着目しながら知識・技能を習得し、よりよい動きを追究していくうえで有効であった。

【手だて③】課題解決の糸口となる視点「今日のキーワード」の設定について

児童 A にとって「今日のキーワード」は、課題解決の方向性を明確にし、仲間と共通理解をもって学習を進める支えとなった。第 2 時では、「動く」「距離感」を意識することで、ボールを持たない動きの改善につながった（資料 8）。第 3 時では、「ゴールへ」「相手のいない場所へ」を手掛かりとして、得点につながる動きを追究する姿が見られた（資料 11）。また、第 4 時の「サポート」「出したら動く」では、仲間との連携を意識した動きが見られ（資料 14）、第 5 時では「マーク」「ゴールは背中」によって守備での体の向きや位置取りが改善された（資料 15）。さらに、第 6 時の「広がる」では、空間を意識した攻撃へとつながった（資料 18）。第 7・8 時では、それまでに学んだキーワードを基に仲間と課題を共有しながらプレーする姿が見られ、振り返りからも状況に応じた判断ができるようになったことが伺えた（資料 23・24・25）。これらのことから、「今日のキーワード」は、児童が見通しをもって学習に取り組み、仲間と協働的に課題を解決しながら、よりよい動きを追究するうえで有効であった。

【課題】

本研究では、可視化資料の活用により児童の気付きや切実感を引き出すことができた。一方、ヒートマップや動画から得られる情報が多い場合、実態に応じて視点を焦点化して資料を提示する必要がある。また、ドリルゲームやタスクゲームによって知識や技能の習得を促せたが、守備のように複数の判断を同時に求められる内容では、視点提示も必要であった。「今日のキーワード」は課題解決の手掛かりとして有効であったが、学習内容の増加に伴い複数の視点が生まれ、何を優先すべきか迷う児童もいた。今後は、状況に応じて必要なキーワードを児童自身が選択・整理できる支援の在り方を検討していきたい。